

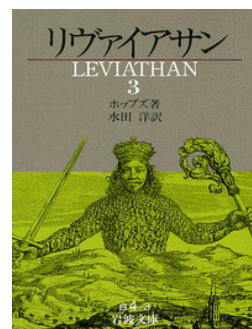
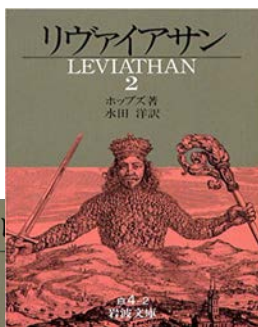
## 経済学部 教授 坂口明義 Akiyoshi Sakaguchi

政治学の古典として有名な本だが、ここでは、社会科学全般を学ぶのに役立つ人間論の書として本書を推薦したい。

私が専門とする経済学においては、アダム・スミス以来、利己心に基づく個人の行動がどのようにして社会全体の利益につながるのか、が研究されてきた。ところが、日本社会では通常、利己心=悪、利己的な個人=悪人とみなされるので、特に初学者は、なぜ「悪人」の存在から出発して経済学に取り組まなければならないのか、という根本的な疑問にとらわれがちである。「悪人」を「善人」に変えれば「問題解決」ではないかと考えると、経済学は不要、道徳教育のほうが重要、という結論になる。経済学を続ける人は、リアリズム現実主義を理由に「悪人」の存在を前提とする方法論的「性悪説」の持ち主だけとなる。

私自身は後者を選択したわけだが、長い間「これでは人間不信ではないか」という後ろめたさを拭いきれなかった。だが最終的にこの迷いは、本書を読むことによって払拭された。本書によれば、利己心それ自体を悪と考えるべきではない。「自然状態」(法も国家もない社会の状態)にあっては1人1人が自己保存の欲求をもち、これを満たす対象は何であれそれ自体「善」であり、この欲求に従う行動が他人を侵害する場合には「悪」となる。個々の「心」を善と悪に分類する日本的通念とは別の人間観がここにはある。経済学に限らず社会科学を勉強していくことに確信がもてない人に、本書をお薦めしたい。

リヴァイアサン / トマス・ホブズ著 ;  
水田洋訳 岩波書店, 1954.2-1985.6  
(岩波文庫 白版)



本 館 X/080/I95W/Hob

神田分館 X/080/I95W/Hob